

ひとりの子供が海岸に打ち上げられた大量の魚や貝をそと拾い上げ、海に戻していました。それを見た通行人があざ笑うかのようにいきました。「全部助けてやれるわけでもないのに、そんなことして何になるんだ?」。すると、子供は得意気にいきました。「何にもならないかもしれないけど、魚にとってはとても大きな意義があるんだ」。

慈濟紹介の中でこの話を聞いたとき、わたしは深く感動しました。慈濟はこういいます。「ひとりの人を助ける力があれば、その人を助けなさい。ひとりの人を助ける力はないけれど、一食の援助ができるなら、それをやりなさい」。わたしは今回冬の物資を配給する慈濟の活動に参加しました。これは体の不自由な人たちに冬の物資を送り、幸せになってもらおうというものです。配給できる人に限りがありますが、愛と温もりには限りはありません。もし、だれもがほんの少しばかりの愛を与えることができたなら、子供のように純真な心を持っていたなら、人と人との間に温もりと真心があふれ、和やかな社会の建設や美しい世界の創造も夢ではないと思います。今回の活動を通して、わたしは慈濟をより一層理解しました。そして慈濟と合璧の間には多くの共通点があることを感じました。

一、感謝の気持ちはわたしを成長させ、感謝に報いることでわたしは達成感を得る。この言葉は、慈濟の活動に参加する何年も前に董事長から聞いたことがあります。董事長はこれを口にするだけでなく、二十年以上にわたって実践してきました。今回の活動の中で耳にする機会にもする機会も最も多かった言葉が「感恩」です。先輩同士、宿遷の人たちに対して、チームリーダーとわたしたちの間で、いつも「感恩」といっていました。感謝の気持ちがわかる人は自然と謙虚になります。そして謙虚になってはじめて成長します。また、感謝の気持ちがわかる人はその感謝に報いることの大切さもわかります。そして感謝に報いることで自然と達成感を味わうことができます。往復のバスの中で先輩の邱さんはずっとお互いが感謝することの大切さを教えてくれました。彼女は運転手や慈濟のボランティアにも感謝しました。そして、わたしも感謝の気持ちを表したいと思うようになりました。



感恩一：花蓮の旅を計画し、慈濟との出合いを与えてくれた董事長に感謝します。董事長は慈濟に入ってから29年。慈濟の理念を伝えてくれたことに感謝します。

感恩二：慈濟を教えてくれた呉添福さんに感謝します。花蓮で慈濟の精神を味わうことができました。

感恩三：林智慧さんに感謝します。穏やかな笑顔、ユーモアに長けたお話、おもしろい講演、温かい両手はわたしの心に深く刻まれました。

感恩四：大きな愛の前の小さな愛、これによって家庭も仕事も安泰であることを教えてくれた蘇美玲さんに感謝します。

感恩五：歌いながらの手話が素晴らしい許娟娟さんに感謝します。忘年会でやったあと多くの人に教えてほしいと頼まれました。また、今回の冬の物資配給の活動に参加人数の限りがある中、5名の枠を確保してくれたことにも感謝します。

先輩たちの指導に感謝します。今回、はじめて活動に参加して、わたしたちは多くのことを学びました。今後にも多くのことを学んで、それらを実践するとともに大切な教えをほかの人にも伝えていきたいと思います。そして「感謝の気持ちはわたしを成長させ、感謝に報いることでわたしは達成感を得る」の教えを多くの人に感じてもらえるようにしたいです。

二、喜んでやる、進んで受け入れる

嘉定区の慈濟委員とボランティア、あわせて50人。宿遷で援助を必要とする村は5つ、585世帯、障害者数1097人。配給する物資はコート、ジャケット、下着、米、油、緑結品の品など。リーダーの黄さんと邱さんがみんなに仕事を分配しました。わたしの仕事は物品受領書の押印でした。1枚の物品受領書に押印箇所は5つ。単純に計算して1097人×5個、押し直しのケースも含めると6000個近い判を押さなければなりません。仕事は、やって来た人たちに大きな声であいつすることからはじまります。「おじいさん(おばあさん)、新年おめでとう。その紙、もらえますか?。そうやって受け取った物品受領書に素早く押印したあと両手で彼らに返します。「ありがとう。これ、持って。こちらですよ。こうやってマイナス5度の寒風の中で、わたしはひとりひとりに対応しました。あまりに忙しくて寒さを感じることもありません。右腕は判を押し続けたため温かく、まったく気がになりませんでした。また、わたしたちはずっと立ちっぱなしで腰を曲げて押印していたので、腰や腕が痛くなりましたが、それでも彼らの笑みを見ると、心から温かい満足感がこみ上げてくるのでした。先輩の蘇さんがわたしに持ち場を代わるから少し休むようまで頑張りました。しかし、わたしは「大丈夫」といって、最後の判を押し終わるまで頑張りました。そのあとリーダーの邱さんを手伝って配給物品や人数の統計を作りました。わたしは我を忘れて作業に励みました。わたしは「喜んでやること、進んで受け入れること」の大切さを実感しました。



喜んでやる、進んで受け入れる。慈悲の心にあふれる慈濟の人たち

今回の活動を通して多くのことを感じ、多くのことを学びましたが、ふとあることに気付きました。それは、わたしたちがこんなに多くのことを発見したり、吸収したり、感じたりできたのは董事長の影響があったからだということです。「目標を高く持ち、普通の人たちとの縁を大切に、簡素な喜びに幸せを感じる。広い視野で安定を求めれば事は成しやうい」。これは慈濟に入ってから29年の董事長の人生哲学です。このほか董事長は「My life is my message! (わたしの生活、それがわたしの伝えたいこと)」という考えで、自分の人生をメッセージとして接してくれます。それに「関心、關懷、關照(気配りと思いやりで接する)」や「感謝報恩、回饋社会(感謝と報恩の念を以て、社会に寄与する)」をいくつも実践しています。

董事長と慈濟はともに食事のメーカーや節約の習慣を要求します。また、何事もはたかなく努力することを要求します。董事長は日本や台湾へ見学ツアーに行きとき服装や荷物の統一を要求しました。慈濟も服のボタンは全部留めることや女性の髪飾りの統一を要求します。どちらも細部まで疎かにしません。合璧ではこうした董事長の教えが精神的な力となっています。慈濟にはこのような言葉があります。「団体はそろふことで美しくなる」。それに董事長が幹部に要求する三大基本態度のひとつ「熱意」についても慈濟の活動の中で通じるものを感じることができました。

董事長と慈濟には共通する部分がたくさんあります。わたしは縁あってこれを学ぶことができました。今後にはさらに自信をもって、董事長の足跡を盾に合璧の精神を発展させていきたいと思っています。

最後に、今回の活動に参加できたことを心から感謝します。 上海合璧 生産管理部經理 張炳香



不断地思考与行动
诚信规范创新卓越
创造价值共生共荣
感恩报恩回馈社会

出版社：合璧文化基金会
总編：王迎春、林生富

发行人：詹其力 編輯指導：陈庆煜、詹杰文
編輯委員：李高燕 印刷：上海綜禾印刷有限公司

2012/05
第14期 05月10日发行

經典一二三

わたしのためでなければ、だれがわたしのために? 經典一
わたしのためだけなら、わたしはだれか? 經典二
今でなければ、いつなのか? 經典三

この三つは董事長のお兄さんの娘さんのご主人、洪清海さんが2010年10月17日に董事長と会食したとき、董事長について語った言葉です。わたしはこれを經典一、二、三と名付けました。わたしのためでなければ、だれがわたしのために? 詹其力、其力、其力(自活すること)。この名前が董事長の出生と関係あるかどうかはわかりませんが、董事長はまさに名前のおりの、自活する成功者です。董事長は貧しい家庭に生まれ、14歳のときにおじさんの家に養子にされます。そこで辛い思いをしたことにより、いつしか自活するために起業家を目指すようになりました。



「立根原在破岩中、咬定青山不放鬆(岩の割れ目に根を下ろし、青い山をがっちり噛んで離さない)」のような不屈の精神と「千磨萬擊還堅勁、任爾東西南北風(何度叩かれても屈することなく、四周から吹く風に任せる)」のような執念。それにこつこつ続けた努力がやがて大きな力となり、董事長は今日の成功を成し遂げました。もし董事長に頑張りがなかったら、自らの生命の舵をしっかり握っていかなかったら、はたして今日の成功はだれの手にかかると? だれが董事長の座に? すべての財産、精神の糧、智恵の結晶は董事長が自らのために培った成果なのです。

わたしのためだけなら、わたしはだれか? これはとても偉大で気概を感じる言葉です。「家族の情、友情、愛情」この三つは普通、人生の三大柱だと思います。人はこれに対して喜んですべてを捧げます。これだけでも人は十分だと思いますが、それは温かくて小さい愛です。それに比べて董事長はちがいます。家族の情についていえば、わたし自身、合璧に入社して3年になりますが、董事長が家族を連れて上海で団欒のひとときを過ごすのを見たことがありません。自分の息子が上海に買った家も見に行かなくていい。孫の手を繋いだり頬を撫でたりもしませんし、息子や孫のことを常に気に掛けているわけでもありません。なぜなら、これらはすべて董事長にとって小さな愛にすぎないからです。「家族については彼らが健康で安全ならそれでいい」。これは董事長の家族に対する心からの言葉です。考えてみると、董事長の行動は実に尊敬に値するものです。董事長は毎食上海合璧に来ると、まず1階から3階までの事務所を回ってみんなにあいさつします。みんなといっしょにトイレを持って食堂の列に並びます。朝食のとき、目玉焼きを新入社員ひとりひとりに取ってあげます。作業員たちと会食のとき、会社の近くのレストランに行くと、いつも「おいしい」と満足げにいいます。新入社員ひとりずつに台湾の百元記念紙幣を自ら両手で贈ります。わたしは董事長が同僚のひとりひとりに記念撮影するときのカシャというシャッター音を聞くと、言葉で表せない感動を覚えます。董事長の地位にある人が一作業員に対してこんなに親切にするからです。このような従業員に対する愛は董事長の言葉や行動の細かなところによく自然に見られます。小さなところでさえも、大きなところはいうまでもありません。董事長はよくこういいます。「従業員の家になにか重大な突発事故が起きた場合、わたしは一分でもどうすべきか決断を下します」。この一言がすべてを物語っています。ここに見られるのは従業員に対する愛です。その視線にはだれにも止められない強さがあふれています。そして、こういったらには、董事長は全力で行動に移します。こうやって人の心の奥深くにまで残る感動や涙なしでは語れない救助の物語がいくつも生まれました(詳しくは「感謝報恩回饋社会実例」の中にあるためここでは紹介しません)。

これまでの話を聞いて、「自社の従業員を思いやるのが大きな愛といえるのか」と思われる方もいるでしょう。しかし、わたしの意味は800人の孫(董事長は従業員のことを戸籍登記のない孫といえます)への、こうした愛はまだ小さな愛なのです。董事長は血小板減少症を患う大西北の丁豪くんの治療費を負担したり、出張でタクシーに乗って倍の運賃を運転手に渡したりしました。これも小さな愛でしょうか。考えてみてください。わたしは今後二度と会うことのない人のためにポケットのお金を分け与えるでしょうか。それにホテルを離れたときホテル従業員のために客室に何十元も置いたり、自分の母校がお金を必要としているときに進んで援助の手を差し伸べたり、これらも小さな愛でしょうか。また、個人として慈濟の事業に何十年にもわたって寄付をしたり、会社の従業員を積極的に慈濟に加入させたり(年初めに上海合璧でも百人以上が加入)、これも小さな愛でしょうか。董事長の行動はだれのためのものですか。自分のためですか? いえ、ちがいます。そこには「わたしのためだけなら、わたしはだれか?」という気力が感じられます。

今でなければ、いつなのか? これも董事長の習慣と深い関係があります。「今日のことは今日片付ける」。みんなよくこういいますが、ほとんどの人は明日になって今日のことが終わっていません。すぐ行動を起こさなければ、計画は永遠に眠ったままです。董事長は思い立ったらすぐに行動します。そしてやりながら修正します。さらに、すごいのは開始期日のあるものも前からスタートすることです。「何でも前もって準備が必要」。これは董事長の口癖です。たとえば出張のスケジュールにしても、毎回出張から帰って最初にやることは次の出張の計画を立てることです。

今でなければ、いつなのか? いつも一分一秒を無駄にせず、今のときに生きることは大切なことだと思います。わたしのためでなければ、だれがわたしのために? 經典一
わたしのためだけなら、わたしはだれか? 經典二

今でなければ、いつなのか? 經典三
董事長のすべてのよさを語るのに、この三つだけではまったく足りません。 上海合璧総務課 李高燕特助
それでもみなさんの知ってもらいたいと思ってここに紹介しました。